

庄野潤三論（五）——〈ガンビアもの〉三作をめぐって（I）——

A Study of SHONO Junzo (5): Focusing on His Three Works at Gambier

鷺 只 雄

Tadao SAGI

庄野潤三論（五）抄録

前稿では『ガンビア滞在記』を中心にこの時期の作品を検討したので、本来の順序からすればそのあとに続く時期の作品の検討ということになるのだが、このあと庄野文学は意外な展開を見せる。

ガンビアのケニオン大学から帰国して二十年目の春に思いがけず同大から名誉文学博士の学位を授与されるという栄に浴することに、夫妻でガンビアを再訪し、旧交を温めると共に新しい知友と親交を結ぶことになった。これを契機に氏のガンビアへの創作意欲に火がつき、『シェリー酒と楓の葉』（78）、『ガンビアの春』（80）、『懐かしきオハイオ』（91）と長編が相次いで書かれ、〈ガンビアもの〉と呼ぶべき一群が形成されるに至った。従って本稿では刊行の

時期は多少後になるが、〈ガンビアもの〉というテーマ、あるいは素材の同一性から考えて、これら三作についてもここで『ガンビア滞在記』と比較考量しつつ考えておくのが適当と判断してそうすることとした。

はじめに

前号では『ガンビア滞在記』を中心に、昭和三十二年（一九五七）から三十四年までの作品について論じたので、今回はその次ということになるのであるが、実はこのあと事態は意外な展開を見せ、それに伴って庄野文学もまた新たな展開を示すのである。

というのは庄野氏がアメリカのガンビアから帰国して丁度二十年

目の春に、氏の留学したケニオン大学から招かれて名誉文学博士の学位を授与されるといふ栄に浴することになり、思いがけずガンビアの地を夫妻で再訪することになり、旧知の人々と旧交をあたため、新しい知友と親交を結ぶことになったからである。

これをきっかけとして庄野氏は現在まですでに『シェリー酒と楓の葉』(78)正しくは1978と表記すべきだが、煩雑なので以下前二ヶタを省略、『ガンビアの春』(80)、『懐かしきオハイオ』(91)と三冊の本を書いてガンビアへの思いは益々深くそして強く、殊に『ガンビアの春』などは二十年ぶりのガンビア再訪記であるが、全篇に瑞々しい青春のよみがえりがあり、若々しい息吹に溢れていて読者もまた心地よい興奮に包まれる。

従って本号では執筆刊行された時期は後になるが、〈ガンビアもの〉というテーマ、あるいは素材の同一性から考えて、これら三作についても『ガンビア滞在記』と比較考量しつつ、ここで考えておくことにしたい。

一、〈ガンビアもの〉の整理

まず始めに、庄野夫妻がオハイオ州ガンビアに滞在した時期から〈ガンビアもの〉を書いて上梓した経緯を整理して示すと次のようになる。

- (1) ガンビア留学 往路―57・8・26(横浜発・客船クリープランド号) 9・7(サンフランシスコ着) 9・14(ガンビ

ア着・鉄道) 復路―58・7・21(ガンビア発サンフランシスコ着・飛行機) 7・28(サンフランシスコ発・客船クリープランド号) 8・11(横浜着)

- (2) 『ガンビア滞在記』中央公論社 59・3・5 書きおろし。
(3) ガンビア再訪 78・4・21〜27(往復飛行機) 4月27日のオナリス・デーに名誉文学博士の学位を受ける。

- (4) 『シェリー酒と楓の葉』文芸春秋 78・11・15(初出は「文学界」77・1・3、4、7、9、11、78・1・3、5、7に十回連載)。

- (5) 『ガンビアの春』河出書房新社 80・4・30(初出は「芸」78・11・12、79・3・80・1に十三回連載)。

- (6) 『懐かしきオハイオ』文芸春秋 91・9・25(初出は「文学界」89・3・3〜91・4に二十六回連載)。

庄野氏はアメリカのオハイオ州ガンビアのケニオン大学に一年間留学したのだが、その立場というか、資格というか、身分・位置づけについてはケニオン大学の身元引受人の一人であるオールドリツジ哲学科主任教授にも奇妙なものにうつつたもののように、庄野氏を紹介する歓迎パーティの席でのスピーチで、庄野氏は大学に教師として来たのでもなく、また学生として来たのでもない。だから大学の授業に本人が出席を希望すれば聴講することは出来るが、義務ではない。ではどういう目的で来たのかと言えば、氏は作家であり、アメリカの田舎の小さな町では人々がどんな風に生活しているのかをよく見てみたい、観察したいという目的で来たのであると紹介しているところに明らかであろう。

ついでに記しておく、右に述べたように氏に聴講の義務はなかったが、折角の機会でもあり、またもう一人の身元引受人でもあるジョン・クロウ・ランサム教授の定年前最後の年にあたり、その講義に列する又とない機会ということもあって週二回の詩入門の講義に前期は出席し、後期はランサム氏の薦めもあって英文学のサトクリッフ教授の「悲劇の研究」の演習(週二回)に出た。

前述のように、授業は出席しただけでよく、質問されることも、試験も、提出物も一切なかった。庄野氏は授業には殆ど休まず、皆出席のようであったが、テキストの入手に手間取って一特にサトクリッフ教授の場合はギリシャ悲劇から「セールスマンの死」に亘るという風に広範囲であったため、事前に作品を入手して読んでおく事が十分できなかったため、このセミナーは自分の今後の仕事にきつと役立つ筈と思いつながら、肝腎の作品を読んでいないために、発表も議論も残念ながら多くはチンプンカンプンの状態で、授業中は沈黙を守っていたようである。

二、『シェリー酒と楓の葉』との比較

〈ガンビアもの〉の第二作となる『シェリー酒と楓の葉』(78・11・15 文芸春秋)の第一回が同題で「文学界」(77・1)に発表され、以後隔月に表題を変えて発表されて十回目「除夜」(78・7)で完結となった。

庄野氏のガンビア滞在期間は57年9月14日から翌年の7月21日まであり、この第二作が対象とするのは57年10月21日から同年末の12月

31日までの70日間である。

第一作の『ガンビア滞在記』(59・3・5 中央公論社)は約一年間を扱っているのに対して、こちらはガンビアに着いて1カ月、漸くアメリカの生活にも慣れて新しい生活がスタートした約二カ月間を描いている。

当然、そこには違いがある。両作の相違から始めて、その特徴を明らかにすることにした。

(一) 第一章「シェリー酒と楓の葉」は一九五七年十月二十一日から同月三十一日までの事を記し、アメリカに着いて約一ヶ月以上が経って漸く生活にも馴れてきた頃の事が描かれている。

ついでに言っておけば『シェリー酒と楓の葉』一卷は「シェリー酒と楓の葉」から「除夜」まで全十章で構成され、期間は前述の十月二十一日から同年の十二月三十一日までの約二カ月間をあつかっている。そのため『ガンビア滞在記』より記述は当然詳細であり、また意図的なカットや、あるいは付加があつて、時間的には同時期を扱いつながら作品としては決して二番煎じなどではない独立した作品としての存在を主張したものとなつておらず、まづ言っておきたい。

話をもとにもどして、この第一章に記すところはランサム氏の好意によるマウント・バーノン高校への引接紹介(兄・英二からの文通相手紹介依頼の件)・ランサム夫人の型破りの個性紹介・ランサム氏の授業の内容とケニオンの学生の特徴・床屋のジム紹介・デニス大とのサッカー応援に行くが敗れる次第。ホーム・カミングデーのオーバリン大とのフットボールには勝つ。ミノーとジューン

の紹介と『ディンシヨウの訪米がその中味である。』

これに対して『ガンビア滞在記』でこれに該当する時期のものは「9 ディンシヨウ来る」と「10 ホームカミンググフトボール」の二章であるが、共に『ディンシヨウとフットボールに焦点をあてて一方は行動的でユニークなインド人の女性を鮮やかに点綴し、一方はフットボールをめぐる学生と女子学生の華やかな応援合戦とその熱狂ぶりを伝えて庄巻だが、共にそれ以外は全てカットしている。

言いかえれば、「シェリー酒と楓の葉」が野放図に飛び込んでくる素材を際限なく受け入れてゆくのに対して『ガンビア滞在記』の方は素材を限定してテーマを集中的、効果的に表現することを企図していると言つてよいであろう。

(二) 第二章の「フィンランド土産」のメイン・テーマは英文学のサトクリッフ教授とその一家である。氏はアメリカで最も難しいとされるローズスカラシップの奨学金を得て、オックスフォード大学で英文学を学んだ秀才で（庄野氏の身元保証人であるランサム教授も同じ経歴である）、趣味は広く、スポーツは万能、射撃にまで手をのびしている。プリツシラ夫人は小説家で、長く短篇小説を書いていたが今は長篇に没頭しているという。二人の子供がいて、長男のジョン（十一才）は水泳が得意で将来のケニオン大学を背負つて立つだろうと囑望されており、またお父さん譲りの射撃の名手で、今年も兔を何羽かとつた由。長女のセーラ（七才）はかわいい女の子でフィンランド式のおじぎをする（去年サトクリッフ氏が一年間ヘルシンキの大学で教えた時に覚えたという、手を差し出して、片足を後ろに引いて、ちよつとかがむようにして挨拶する）。それか

らミノー夫妻を迎えての初めての夕食・そのお返しにシェリーへの誘い。

これに対して『ガンビア滞在記』には「フィンランド土産」に相当するものがなく、全てカットされている。

その理由は何故だろうかと考えてみると、サトクリッフ家がつまらない一家でないことは明らかである。いや、むしろ逆にこの一家は魅力的であり、個性的である故に、脇道にそれるものとして注意深くカットされたものではないかと思われる。

詳しくは後述することになるが、『ガンビア滞在記』における求心力―夾雑物を排除して主調低音を演奏する試みはかくも強いのである。主調低音とは言うまでもなく、ミノー一家のことである。

(三) 第三章「林の中」の中心は数学のニコデイル教授夫妻である。『ガンビア滞在記』では作品に初めて登場する時に、夫妻が「ケニオンのどの教授の家族ともつき合い」がなく、「孤立した生活」を送り、特に「教授は頑なで交際嫌いだという評判」というふうで紹介されているために甚だしくマイナスのイメージばかりが印象され、紹介されるエピソードもまた型破りなものだけにともすると〈変人〉〈奇人〉のレッテルを貼つて能事終われりとしがちだがそれでは夫妻への見方、把握のしかたが一面的であり、偏つていといわなければならぬ。

第一、庄野夫妻のガンビア滞在中、物心両面において最大の支えとなり、最も親しく往来したのは、ミノー一家とニコデイル教授夫妻をおいてほかにはないのだから。

夫人は特に日常生活の面でマウント・バーノンの街までの自動車

の送迎を二、三日おきにしてくれるほか、近隣の博物館への案内や湖、島へのドライブから、さまざまの街の人々を紹介(たとえば、ウィルソン氏〔理髪業の他、農場経営・オーグシヨンもする〕、隣町に住むデパートを経営するキニー一家〔父の老キニーは庄野氏が帰国後の一九五九年世界一周旅行の途次東京に訪ねてきて再会した〕など)してくれ、ロックフェラー財団からの送金が遅れた時には喜んでお金を用立ててくれたばかりでなく、庄野夫人にお金がない時にはいつでも借りに来ることを約束させる程の苦勞人でもあるのだ。

だが何と言っても庄野氏にとつて嬉しかったのはジニーやトムというケニオン大の律儀で礼儀正しくすぐれた学生たちを引き合わせ、これと友達となれたことであろう。ちなみにジニーはレバノン人で、今年の六月トップの成績で卒業し、エール大学医学部に奨学金を貰って九月に入学したが、どうしても英文学と創作志望の志を変えることが出来なくて一週間いただけで再びケニオンに戻り、アルバイトをしながら今歴史と文学の講義を受講している。のち、全米の奨学金中でも最も難関といわれるローズスカラシップに合格〔ケニオン大の教授の中でもランサム氏とサトクリッフ氏の二人だけという〕して翌年からオックスフォード大学に二年間留学することになった。一方、トムはハワイから来ている日系二世で、授業料は親から出してもらっているが、それ以外はアルバイトでまかなっているまじめな学生で、日本語は殆ど話さない。のち、フィラデルフィア大学の医学部に進学する。彼等と知り合いになれたことで氏はアメリカばかりでなく世界中から集まって来ている学生たちの事情・家族・夢・希望などを直接知ることができたわけであり、その上彼等に誘われてクリスマスの休暇にはアメリカ東部ワシントン

への旅を、卒業式後の六月にはニューヨークへの旅を―もう一度青春のよみがえりを覚えるような生涯忘れえぬ旅を経験することになったからである。

終わりにもう一つ指摘しておきたいのは、ニコデイル教授の見識を示す次のような語録が『シェリー酒と楓の葉』にはあるが、『ガンビア滞在記』からは全てカットされていることである。

〔西洋文化の根底にあるのはラテン・ギリシャだから、中学校ではこれらの授業にもっと力を入れなくてはならない〕日本の文化は支那からの影響を受けているから、漢文をみっちりやらなくてはいけない(同上〔林の中〕)『This is Japan』を見せると教授は外国風の絵と写真は悉く「駄目だ」といい、古い仏像の写真などが出てくると「これはいい」という。「日本人が外国の真似をするのはよくない。なぜ日本固有の文化を守ろうとしないのか。Keep your tradition!」(船長の椅子)。

二つの作品における以上の描き方の相違について考えてみると、作者の側にも責任の一半はなかったとは言えないかもしれない。

というのは『ガンビア滞在記』の方では(奇人×変人)のイメージに乗った方向で描かれ、これを肯定していると見られるのに対して、後者は何らの成心、先入観なしに夫妻のプラスもマイナスも、表も裏も、まるごとさらけだす描き方をとっているからで、それによつて『ガンビア滞在記』では知られることのなかった夫妻のもつ美質・識見・大きさが発見されて我々の前に提示されることになったからである。

これに対して、『ガンビア滞在記』ではこの時期に相当するものとしては「十一　ヘイズ食料品店とウィルソン食料品店」と

「十二 万聖節前後」の二章となるが、前者の「十一」の方は『シエリー酒と楓の葉』では全文カットされている。その理由は恐らく「十一」における二つの食料品店の百科事典的比較研究報告書の如き観のあるスタイルとこの作品の日記の形式とが相反する故であろう。それにこれだけ多面的に分析・検討したあとで、日記的断片を連ねることはおよそ蛇足の最たるものでもあろう。

(四) 第四章「ヨークシャーの茶碗」は十一月五日(火)から十一日(月)までの一週間におけるディナーやお茶の会などへの相互招待を描いている。ガンビアでの暮しも二カ月近く経ち、フアカルティの一員としてのなじみぶりもうかがえるので、やや丁寧にごの一週間の追ってみると、五日の日にサトクリッフ教授(英文学)の家に赴き、ディナー招宴の日取りを相談すると、夫人は大学に出ている夫に相談して八日(金)の十九時に決定。小学生の娘のセーラが風邪で学校を休んでいたが、喜ぶから上がれといわれて家に入り、教授の母(英国のヨークシャー生まれ)から夫人がもらって来たという小鳥や花が描いてあって趣のある、一寸ラムの「古磁器」という随筆を思い浮かべさせる茶碗でお茶を御馳走になる。

ついでミノー家に行き、夫妻とインドから来ている母親のディンシヨウを十日(日)の夕食招待に決定。ところが次の日、とんでもない横紙破りの事件が出来る。

午後には数学のニコデイル教授の夫人が来て、金曜の晩にお茶の会を開くのだが、サトクリッフ教授夫妻を呼ぶつもりでいたところあいにくその日はこちらに招かれていてだめというのだが、そんならこちらでのディナーは食事だけにして、時間も早めて十八時半から

にして庄野夫妻も一緒に来てほしいと強引に割りこんできたのだ。前述のように知合ってから日が浅い上に、隣町のマウンツ・バーノンへの買い物物の送迎に声をかけて車に乗せてくれたり、菊を見に遠くの有名な公園にも連れて行ってくれたり、学生のジニイヤトムたちと一緒にお茶の会に招いてももらったりしていることわりきれずに承諾させられてしまったのだ。しかもデザートは出すな、甘いものは出すなと「三度くらい念を押」されて、せつかくのディナーの楽しみもふいになる。そのあと、更に夫人はこれから映画「十戒」を観に行かないかと誘うが、あいにくお茶の先約があつてことわると、誰の家に行くのか、他に誰が来るのか聞いてみるというので、流石にそれはやめてほしいとことわった。

あとで、サトクリッフ夫人にことわりに行つて説明し、諒解してもらつて事なきをえたが、夫人も不快感をあらわにして、ニコデイル夫人から招待の話があつた時、先約があつて行けないと答えたのに対して「誰の家へ行くのか」と聞いてきたが、「これは礼儀に反すること」であり、「誰もそんな質問はしない」、結果として庄野の承諾を得てこういう段取りをつけたが「これは礼儀に叶つたこととはいえない」として、ニコデイル夫人の行為を常識はずれ、ルール破りとしてきびしく断罪している。つまり、こうした自己中心的になつて周囲が見えなくなり、強引に事をすすめるところが夫妻の交際を敬遠される所以なのであろう。

ワインバーク家でのお茶のあと、ジューンは庄野が唯一の男性だったと聞いて笑う。七日、ランサム氏の授業のあと、久しぶりにフアカルティ・クラブに出席し、オールドリッチ氏他と会い、中にいたウェンズロー氏(経済学)とは先日テニスの試合を申込みれて

手合わせしたが、段違いの腕前で歯が立たなかった。

ガス湯沸し器が故障したので、ジューンに話すとすぐ電話してくれて、忽ち修理に来てくれて直った。丁度その時、マウント・バーノン高校の生徒と帝塚山学院の生徒との文通の話を書きつけて、切手収集の目的もある男が訪ねて来たので、英二兄の住所を書いて与える。

八日は嵐で、エリオット氏の子が風邪と聞き、丁度日本から送ってきた「チャイルド・ブック」をもって見舞いに行く。十八時にサトクリッフ夫妻が来て土産にフィンランドの手織り布と自作の載った「ウエスターン・レビュー」という雑誌をくれる。酒の話から料理に移り、春雨と小蝦入りのスープも天ぷらも、まぜずしもおいしいといってお代わりをし、「アメリカの料理は、肉、野菜、果物、それだけだ。そんなものをいつも食わされていると、実にこの料理はおいしい」といつてきれいに平らげ、次に行ったニコデム家では何も飲まず、何も食べなかった。ニコデム家（ポーランド人）にはジューン（アメリカ）、デインシヨウ（インド）、庄野夫妻（日本）、ワインバーグ夫人（コロンビア）、サトクリッフ夫妻（アメリカ）の五カ国九人が集まって話した。

九日、寒い中フットボールの応援に行くがハイラムに14―12で負け。昨日もらったサトクリッフ夫人の小説を読むが、「風変わりな小説」である。

十日、ワインバーグ夫人の車でマウント・バーノンのビビイ家のお茶の会に招宴。運送会社の社長シユライレット氏が第二次大戦中イタリアに従軍中射止めたのがビビイで、娘時代の十二年前はさぞや美人と想像される美貌で二児の母。室内の調度品や設備はケニオンのどの教授の家よりも桁違いに贅沢で明るく、ガンビアではお茶

と言えばコーヒーかお茶にクッキーがきまりだが、ここではそのほかにワイン・ウイスキー・マーティニが、またパンの上にベーコンや卵や肉をのせたものがたっぷり用意されていた。顔見知りのマウント・バーノンで百貨店を経営している若い実業家のキニー夫妻も来ていて、今春フロレンスを旅行した際のスライドを写して見せてくれた。この章では次第に交際が拡大して、大学の町の人達とも交流してアメリカの生活観察が深まってゆくのがうかがえる。

十一日、ニコデム夫人の車でマウント・バーノンへ子供たちのXマスプレゼントを探しに行く。帰宅してから、女性軍が外へ散歩に出た留守に一杯やりながらミノーの身の上を聞き、ミノーは来年六月までの客員講師で、それ以後はここを出て勤め口を探さなければならぬということをはじめて知り、驚く。女性軍が帰ってきてお茶となり、夫人が「ざくら」を、氏が「黒田節」をうたった。

これに対して『ガンビア滞在記』は対照的に「十三嵐」の一章に十一月八日のこととして書かれていることは、東京から送ってきた「チャイルド・ブック」をもって風邪で寝ているエリオット家のステイーヴンを見舞い、折から車を借りに来ていたミノー夫妻と出会うまで送ってもらうことと、嵐のような風雨があがったあと、今晩夕食にサトクリッフ教授夫妻を招待しているのだが、花瓶に挿す花がないので探しに出て、宿り木と赤い実のついた枝を見つけてきて、夫人が生けた。これだけの事が書かれているだけで「ヨークシャーの茶碗」に書かれていることは一切カットされている。

ということは庄野夫妻がガンビアの生活になれ、ニコデム夫妻やサトクリッフ夫妻などのケニオン内部の人とばかりでなく、隣町のビビイ夫妻やキニー夫妻とも親しく招きあう仲となっていること

を示すこの章をスツパリ切り落としているのはこれらが無用の、夾雑物だということにほかならない。脇道にそれる、枝道に分かれて行ってしまうという認識があったからに相違あるまい。

つまり、『ガンビア滞在記』にはその意味で一定のストーリー性があり、その主線はミノ一家との交渉であり、副線としてのニコデム夫人との交友があると言つてよいように思われる。

(五) 第五章「窓の燈」は十一月十二日から十七日までを描く。ランサム氏の詩の授業の試験、エリオット家の風邪ひきは三人となり、無事なのは女の子一人のみ。〈玄米〉を食べて早く寝る。十三日は雨、グレイプフルーツとアイスクリームを買つてエリオット家へ見舞いに行き、午後はオハイオ州大とのサッカーの応援に行く。学生数がケ大は五百に対して、オ大は一万五千と大差があるので苦戦は免れないと思つていたところ、案に相違して先制した上終始リードし、3―2で勝つて大喜び。その晩十九時からガンビアの小学校のPTAの会を紹介されて行くと、サトクリップさんが顔を出して積極的に意見を述べる。自己紹介を求められて口財団の役員としてきた小説家でアメリカの田舎の小さな町の家庭生活を見たいと希望してきたことを話す。

十四日(木)ランサム氏の授業でこのまえの試験の正解を示してくれたのを見ると大部分合つている。ニコデム夫人が東京の子供達三人に人形やおもちゃのプレゼントを届けてくれる。ディンシヨウが夕方、雑談に寄つてへよく気をつく奥さんをもらつて幸せな男だ、〈あなた私の夫と会えばきつとお互いに好きになれた筈なのに、入れ違いで残念だ〉、〈ミノー夫婦も、あなた方もお互いに

好きでいてくれるのが嬉しい〉などと言う。雑誌「新女苑」に「ハロイーンの頃―アメリカの田舎町から」(九枚)を送りのびのびになつていた気がかりをやつと果たす。ワインバーグ夫人が来て明晩のフラタニティー(学生たちの親睦パーティーで、豪華な飲み物と料理のほかにダンスパーティーがついていて、学生の出費はかなりなものという)に誘うので二〇時に行くことにする。

十五日、ミノー夫婦の車でマウント・バーノンへXマスプレゼントの残りを買いに行き、帰宅後小包にして送り、ほつとする。ジューンは婦人有権者同盟の大役を無事果たし、リポートも好評で晴々とした様子。しかし、ミノーの評によると、ジューンは人一倍取り越し苦労の性だから、婦人会の幹事なんかを引き受ける柄ではなく、人前で話をするのは苦手なのだと聞いて、ジューンの隠された一面を知つて意外に思う。

ワインバーグ夫妻の車でフラタニティーのカクテルパーティーに行く。これは春秋二回あり、学生は最上の服装で来るしきたりで、フラタニティごとに飲食物が異なり、ミノーが「学生は金持だ。先生は貧乏だが。」という通り、豪華な接待で二日間続き、ジニヤトムや旧知の学生達と飲み且つ語り、食べ、夫人は踊つて一時半頃帰る。

十六日、郵便局へ行くが一通も来ていない。ガンビア唯一のレストラン、「村の宿屋」には到着早々、三日間厄介になつたが、それ以後は行つてない。ミノーと顔を合わせると、昨夜は寝不足が続いていたので早寝して睡眠不足を解消したのだと言い、庄野氏の昨夜の話聞いてそんなにウイスキーが沢山出て、つまみの用意があつたのは残念という顔をする。ジューン母娘とディンシヨウは明日から一週間イリノイ州のジューンの実家へ出かけるという。

二〇時半に二日目のパーティーに行く。ジニーたちの部屋で、ニコデイル夫妻の案内してきたハンガリア人夫妻（夫は結核の専門医）を紹介されるが、元気で陽気な人。学生のケネディからXマス休暇にワシントン見物をすすめられ、OKする。一時に帰る。

十七日、ジューンたちは列車でイリノイに発ち、ミノーは一週間一人暮らし。しかも夕食の招待は全部予約済み。ミノーの誘いでシェリーを一寸飲んでからワインバーグさんの所へ行こうとしていたら、ミノーは交代で取りに行っているNYタイムズを取りに行くのを忘れていて催促されて大慌てに飛んでゆく一幕もある。その前にケネディから話のあつたワシントン行きを相談してみると、汽車だと十五ドルはかかるから、一人五ドルなら行った方がいい、ワシントンは美しい街だから一度はぜひ行ってみた方がいいと勧められる。ワインバーグ家に行くと、一人息子のリカードは四才、腕白で客が来るとはしゃいで走りまわるのをやると寝かせて、二十一時ごろから夕食開始。夫人のガブリエラは慌てることなく悠然と支度。二十三時に退出。

これに対して『ガンビア滞在記』でこれに対応するのは「十四ジューンとディンショウ」であるが、その内容は対照的である。

即ち、前者が庄野夫妻のガンビアでの見事な同化ぶり―大学での生活・同僚への病氣見舞い、ケ大のサッカー応援・小学校PTAへの参加・ニコデイル夫人からの子供たちへのプレゼント・フラタニティーのカクテルパーティーに二日間出席・ワインバーグ家への招宴等々（ここでは後述のようにミノー一家にかかわることは省略した）、交際、交流の範囲がどんどん拡大して行っているとともに、庄野夫妻もまた積極的・能動的に参加して違和感がなく溶けこんで

いる様子が具体的に描かれている。

これに対して後者は、殆どミノー一家に焦点をあてて描き、特に姑のディンショウが若夫婦の中に入ったことで嫁と姑の問題が起きているのではないかと氏は案じ、ジューンが「不機嫌」であった、「沈んでいた」と言つては、何かあつたのではないかとミノーに問いただし、それにミノーが答えるというふうには、庄野家に関わることではなしにミノー一家の動静に関心が集中し、結果としてジューン母子とディンショウがイリノイの実家に一週間里帰りすることになつて氏の心配は杞憂となり、一件落着、と喜ぶことになつている。

前節でも指摘したことだが、『ガンビア滞在記』という作品では、ミノーは作品の中で特別な存在で、主人公は無論庄野氏であるわけだが、それと同じくらい強力に読者をその就職活動に一喜一憂させるといふストーリー展開になつていて（ちなみに「九 デインショウ来る」で早くもその事「||ミノーは来年六月までの任期の客員講師で次の就職先は自分で見つけなければならぬこと」があかされている）だから彼の他の大学への就職が決まつて別れるというところで小説は終わる。

「窓の燈」というタイトルも、夜遅く帰った居間にあかあかと燈がついているのを見て思わずミノーが「ジューンが帰っている」と叫ぶ場面によつていられるもので、無論、今朝、母・嫁・子の三人で里帰りしたジューンが帰宅する筈もなく、そのことで却つて彼の孤独、ジューンへの愛の深さがくつきりと印象づけられる仕掛けにもなつている。

つまり図式的に言えば、前者の「窓の燈」は拡張的、積極的、行動的であるのに対して『ガンビア滞在記』の方は集中的、内向的、

制限的傾向があるとも言ったらよいであろうか。

(六) 第六章「移転計画」は十一月十八日から二十五日までの事を記すが、前章までの展開を受けて、更に新たな面も見せる。例を二、三あげれば、大阪在住の氏の実兄英二氏は作家・児童文学者として著名であるが、この作品にも何度か登場し、ミノール宛の手紙に同封されていた法善寺横町の料理屋みどりの献立表には、「ミノール一家を大阪に迎えた時の架空パーティーのメニュー」と記されてあつてこの奔放な詩人的発想（メニューであれ、新聞の切り抜きであれ、何でも手紙に同封して送るというのが父貞一の癖だったというからその血を受け継いでいるのかもしれない）に狂喜して彼は日本食への質問を連発するという一幕があり、保証人の一人オールドリッチ氏からは氏宅の集まりに日本文学のレクチュアを依頼されて承諾し、その詳細は次章の冒頭に記される〈森鷗外と佐藤春夫〉についての話となり、氏の一面が開陳され、周囲に知られることになるといふ一幕もあった。

この他にもるもろの日常的事象の積み重ねが沢山あり、しかもそれらの殆どは『ガンビア滞在記』には載せられず「十五 ミノールとベンジャミンの一週間」からはカットされているのだが、中心は表題にもあるように、宿舍の移動の件である。一年のサバティカル休暇から帰ってくる教授のために、庄野家は今までの三軒長屋の一軒おいた一寝室の家に代り、そのあとに教授の家を出たミノール一家が入る―というものだが、この計画を聞いてミノールが涙を流して申訳ないとあやまり、氏の方は人数から言つて二寝室は不要だから気にするなどと慰めるのだが、そういうミノールの性情・人間味・暖かき、

心遣いが示され最終的にはどの国に住むのかという国籍の問題などミノール一家の問題に『ガンビア滞在記』は収斂してゆくのである。

(七) 第七章「船長の椅子」は十一月二十五日から十二月一日までを描いているが、まず第一に記されているオールドリッジ家での日本文学についてのスピーチを二十五日の晩にしたことをあげねばならない。これは保証人の一人であるオールドリッジ氏から日本文学についての話をしてほしいと請われて「鷗外と春夫―日本の二人の詩人」と題して話したもので、聴衆はオールドリッジ夫妻、ランサム氏、サトクリフ夫妻、フランス語のハーヴェイ教授夫妻、ジニイと英文学専攻の四年生と庄野夫人の十人。テーマは日本の文学は劇的な事件を表現するよりは、静かで微妙なものをとらえる方が巧みである事に重点を置いて話した。

ランサム夫人は学内のこうした席には一切顔を出さず、さっさと学外に出て友達と悠然とブリッジを楽しむ「型破り」の人だが、人との交際が嫌いなのではなく、形式的、儀礼的なことが厭なのだ。現に、庄野夫妻はガンビア到着早々三日目に昼食に招待されていて、その時もマウント・バーノンのレストラン、オルコブであったが、十一月二十七日の夕食も同店（夫妻の鼠兎の店でもあったことがあとでわかる。同時にその時庄野夫人の余りに美しい着物姿にレストラン中の客が呆気にとられる一幕もあった）でご馳走になり、食後はランサム家で酒となり、テレビで映画などを観て二十三日ごろに帰宅。表題は変わった椅子を夫人は「船長の椅子」と呼び、ランサム氏は「賭博者の椅子」と呼んでいることによるのだが、よく考えてみると、偏狭で詰屈な学者の世界からカバリと抜け

出してさへぎられるものない広闊な世界に悠然と遊ぶ夫人の「型破り」の行き方からすれば、これはまことに言い得て妙と言うべきであろう。

次いで学生のケネディと東部への旅の相談をし、ニコデム教授夫妻の紹介でハンガリー人の結核医コンツ家に行き、ブドウ酒を飲み、感謝祭にはオールドリッジ家の招宴で七面鳥のご馳走になり、ニコデム夫妻を夕食に招くと日本食にワンダフルを連発して喜んでくれる—という具合にどんだん交際の範囲が拡大していつて、ガンビアに到着早々あまりの草深さに「この淋しいところでいったいどうやって日を送ったものだろう」と途方にくれた思いはきれいさっぱりなくなっていた。

一方、『ガンビア滞在記』でこれに対応するのが「十六 ガンビアの周囲」「十七 感謝祭」であるが、右に紹介した事柄は全てカットされている。

では、あるのは何かと言えば、散歩で見えるガンビアの風景（十六）の短いスケッチであり、「十七」ではミノ一家が学生時代の友人を感謝祭に呼んで四日間一緒に過ごし、ホームシックにかかったディンショウが庄野家に愚痴をこぼしに来るといふものである。

カットの事情については推定する他はないが、書きおろして出版するからには当然枚数の制限があり、なるべく読者の興味や関心を引く材料とすることがあり、構成の上からも変化の少ない日常生活を題材としているが故にとかく拡散しがちな傾向に箍をはめ、集中性とストーリー性を保持する—そういう事情から大学教授のパーテイー、交歓の風景などは一般の読者には退屈であり、又脇道にそれるとしたのかもしれない。ただし、その事によって一方が付加し

たことによつて深味や興行きが増し、一方はわかりやすくなった反面浅くなった事は否めないであろう。

(八) 第八章「廢屋」は十二月二日(月)から十一日(水)までのことを記す。妻は二日、風邪をひいたらしく、ゾクゾクするというのが夕方になつてもとまらないのでワインバーグ家での国際婦人会への出席はとりやめにする。英二兄から絵葉書二枚の返事をもらつたケオオンに勤める人が説明を聞きにきたので翻訳して説明する(『ガンビア滞在記』にはなし。以下、二作品に当該事項の記述の有無を記してみた)。四日、雪が降つて昨日エンコしたままのミノの車を学生と三人で取りに行き、それから久しぶりにドロシイズ・ランチへ行き、バドワイザー六本飲んで帰る。店主に日本手拭、ドロシイにハンカチを贈ると喜ぶ。店主はスコットランド出身の元石工で、自分は外国から来た人間の気持はよく分る、だからそういう人達にはこの店ではできるだけアット・ホームな気持でいられるように努めてきたという(『ガンビア滞在記』も同じ)。五日、ウイilson夫妻の車でニコデム家の夕食に、一カ月半も前から声がかかっていたがウイilson氏の都合で延び延びになっていた、ウイilson氏はケオオンの卒業生、五人の子と孫が八人あり、理髪店の他かなり広い農場を経営、時々オーケションもするが、夕食会は大失敗—というのはニコデム夫人が最初に「食べる物は全部テーブルの上にあります」と云つたので見ると、スープとサラダとパンとクラッカーだけ。これではもたないのでスープのお代わりをし、ウイilson氏はクラッカーをスープに落として腹を満たそうとした。ところがそれは誤解で、あとからシチュー山盛りの鉢、三通りに炊い

たライス、大きなケーキと甘いお菓子が十人いても食べきれぬ程次々に持ちこまれて、作った方も食べる方も互いに悲鳴をあげ、―後日ウィルソン氏が知らせてくれたのでオークションを見に行き、ウィルソン氏はこの前とは別人のように、押しも睨みもきく貫禄のある商人となっているのに驚くが、廃屋同然の家のものなのでロクなものはない（『ガンビア滞在記』にもあり）。

六日、午後に財団への一回目のレポートを書く（『ガンビア滞在記』になし）。七日、夕食にワインバーグ夫妻招宴、デザートの時間にミノーとディンショウに来てもらって日本の茶菓子で接待（『ガンビア滞在記』になし）。八日、オールドリッチ夫人の誘いで教会に行き、牧師館で茶菓の接待を受け、夕方ミノーが来てインドの貧困と人口増加の危機について話す（『ガンビア滞在記』になし）。九日、ケニオン大の新聞部の学生二人のインタビューを受け、十六時過ぎから夫人がオールドリッチ氏宅でのお茶の会に行き、七、八人集るがディンショウはハンカチで口を拭く間も惜しんでボンベいの事を話し続けるのに皆うんざり（『ガンビア滞在記』になし）。十一日、二十時からビビイの家でワインとお菓子の会、会する者ニコデム夫妻、ディンショウ、ガブリエラ、キニー夫妻、コンツ夫妻、他四人、雑談後世界の歌の歌唱会となって盛り上がり、十二時過ぎ帰宅（『ガンビア滞在記』になし）。

この章で最も強い印象を残すのはニコデム家の晩餐であり、その悲喜劇である。ニコデム家というのは、今日の料理のように「味はよく、量は圧倒的」に多いというふうには、あくまで善意であり、誠実であり、好意に発するものでありながら、何故かそれがそのまま相手に伝わらず、不如意、不本意な結果を招いてしまうよう

である。世に言う善意あるいは善人の悲劇であり、生きる上で不器用な人間といつてよいのであろう。

その他にこの章では印象的な描出、場面が多く、ドロシイズ・ラッチの店主ラットレイ老人の気骨ある風貌と言動、ウィルソン氏の商人としての貫禄ぶり、ディンショウの饒舌とその臆面のなさを活写し、更にビビイ家での合唱の盛り上がりなど、すっかりガンビアの人と地になじんだ姿がうかがわれるであろう。

(h) 第九章「東部への旅」は十二月十二日から二十二日までの事を記すが、それらは一切『ガンビア滞在記』からはカットされている。ガンビアの地を離れるものについては一切これを排除するというのが『ガンビア滞在記』に課した作者のストイシズムであるからだ。

十二日、アメリカへ来て三ヵ月。午前はランサム氏の授業、午後には原稿執筆。昨夜学生のトムからパイナップルを一個もらう。十八時にオールドリッチ氏夕食会に来宅（夫人は風邪で欠席）、多忙の人なので初めてよく話ができ、『ザボンの花』を一冊もって来たので見せると、留学中にぜひ翻訳して出版をと具体的に方策を示して勧奨される。十三日、午後ミノー夫妻が来てあと一コマ残っているが、気分はXマス休暇のようで一時間程で帰る。終日原稿書き、夜一時頃脱稿。十四日、ニューヨークへ帰省するロシア人の学生がニューヨークへの旅を勧めてくれたので、イースターにはと約す。昼前、オールドリッチ氏に案内されてロックフェラー財団のフアーズ博士が来て、一時間程談笑、知り合いができて愉快に生活中と報告。村の宿屋でランサム・オールドリッチ・フアーズ博士と昼食。夕方、オールドリッチ氏宅に庄野夫妻・フアーズ博士・ランサム・

学生部長フィンクバーナー（数学）サトクリップなどが会してバーボンを飲みながら、へ怒れる若者たちのこと×歴史小説や伝記のこと×日本では個人の手紙の収集が困難なこと等話を話し、ここで別れる。

十五日、十四時にいよいよ帰省する学生の車に便乗してワシントンへ向かい、到着は二十四時。十六日、ケネディがトム（今回はケネディ家に泊まり）と一緒に父の車で迎えに来てリンカーンとジェファソン記念館、国立美術館（こちらは今日、明日と二日に分けて見ることにする）、ワシントン・モニュメント、アーリントン墓地等を見てからホテルで着替えケネディの家で夕食。ケネディの母は冗談をよく言う面白い人、父はハーバードを出て国立公園の仕事をしているかなり上の地位の人らしく、ボストンとニュー・オーリンズ行きを勧めてくれる。肉は羊のモモを焼いたものと野菜・サラダでおいしく二回お代わりをした。手土産に扇子と風呂敷を差し上げ、二十時頃ケネディとトムの車に送られてホテルへ帰る。

十七日、いい天気。散歩がてら古いレンガ造りの建物の通りが方々に残っている中を歩き、朝昼兼帯のサンドイッチを食べる。十三時にケネディの車が迎えに来て、国立美術館で前日見切れなかった名画がずらりと並んでいるのを見るのは何とも豪華なものである。ワシントンの住居跡を見てからホテルへ送ってもらって別れる。部屋でバーボンを飲んでから近所のイタリア料理店へ行き、うまくて安いので（二人で三・九八ドル）気に入り、「八十日間世界一周」を見て帰る。タクシーの運転手はこの映画を観て面白くなかったというお客には会ったことがないと言ったが、事実面白かった。

十八日、天気よく、散歩がてら朝昼兼帯の食事をすませ、十二時

にケネディの車が来て国会議事堂、最高裁、議会図書館とまわり、フアーズ博士から紹介された館の東洋部長のE・ビーン氏を訪ねるが、外出中でその間清水氏（去年八月まで二十年間コロンビア大学で日本語と書誌学を教えていた由）と話を待って戻らないので伝言して去る。ワシントン・カセドラル（建て始めてから五十年になるがまだ半分しかできていない）を見て、ホテルへ行き、一旦別れてから十八時にまた落ち合って学生二人を夕食に招くことにする。十八時に、昨夜のイタリアンへ行き、四人で五・九八ドルの安さとうまさに驚く。

十九日、午前中帰りのバスの時間を確かめ、朝六時発、マンズフィールド十八時着（22ドル）にする。市で一番大きいデパートで妻がマフラーを買い、気がついたらメイド・イン・ジャパンだった。北京楼で焼飯（80セント）を食べるとうまいので晩にも来ることにする。ホテルでミノール宛に着時間の電報を打つ。十三時にケネディ達とフリーア美術館（東洋と近東の美術品収集に特色）に行き、中国と日本の古陶器の美しさと気品に目をみはる。市内のジョージ・タウンで一番古い建物群の保存の実情を見分。二人に礼を言つて別れる時にXマス・プレゼント（ジニイも一緒という）と言つて妻にはマフラー、氏にはウイスキーを贈られ、胸がつまる。晩飯は北京楼で二人で五ドルの定食だがどれもうまい。

二十日、朝五時にモーニングコール、バス停着五時二十分、一杯の客。六時発ピッツバーグ行きに乗り、灯りを消して乗客が眠っている間に十二時四十分に着しておろされ、十三時五分発のシカゴ行きに乗る。十八時半に到着し、ミノールは迎えに来てくれていて留守中の動静を話してくれる。ジューンも挨拶に来る。早く寝る。

二十一日(土)、郵便物が沢山来ていて、大急ぎで返事を書く。午後からヒッチハイクでマウン・バーノンへ行く。ワシントンで腕時計を落としてこわしたので修理を頼み、その他食料品などを買。二十二日、東京の子供から来たセーラ宛ての手紙を英訳してサトクリッフ氏宅に届け、午後は日記を書いているとニコデム夫人が仏人夫妻を案内してきた。夫はソルボンヌ大で物理を、夫人は某研究所で哲学を教えていて二人とも英語はあまり自由ではない。今度、京都の湯川秀樹博士、仏の駐日大使の招待で訪日し、二、三週間滞在して講演もする由。そこへオールドリッチ氏が来てXマス・イブの招待に来てくれたが、あいにくミノーに呼ばれていると話すと、二十五日の昼に変更してくれた。ワシントンの旅の事を話す。

この章で始めて庄野氏はガンビアに着いてからガンビアを離れたわけで、それだけに古都としての歴史と、首都としての気品をそなえ持つワシントンを訪ねた喜びは深かったようである。殊にジョージ・タウンあたりの石造りの古い建物街には一人の感慨もあつたと思われる。

また、国立美術館の質と量には流石に圧倒され、二日に分けて見学し、フリー美術館では特に中国、日本の古陶器の気品と美しさを再認識させられることになった。

そして東部への旅全てが順調に回転した最大の要因はケニオン大学の学生、ケネディとトムの五日間つきっきりの献身的配慮があつたことを指摘しておかなければならないだろう。

(+) 十章「除夜」は十二月二十三日から三十一日までを記す。二十三日ディンショウが一寸来て、二十七日に帰国するという。帰国

の日が近くなって別れに招待してくれる家が多くなって忙しそう。ウィルソン食料品へ行くとお歳暮の肉を包んでくれる(以上『ガンビア滞在記』も同じ)。夕方、トランシュー氏(数学)の迎えの車で同家のお茶の会へ行くとニコデム夫妻、ソルボンヌ教授夫妻(ニコデム家に泊まっている)が先着で皆主にフランス語で話すが、時々英語になり、その時だけ何を話しているのかがわかる。オットンは一言もしゃべらず。トランシュー氏がプリンストン大学にいた時、湯川秀樹夫妻が隣家において親しくしていた由。トランシュー家には三人の男の子があり、長男はハーバード大(数学)、二男は高校生。いずれも無口で変っている。二十四日、Xマスの贈り物を届けにまわる。英二兄が送ってくれた漆塗りのボンボン入れと菓子皿で何を誰に贈るかは妻と相談してきめておいた。サトクリッフ氏宅で上れと言つてツリーを見せてくれ、総長のランド氏宅では夫人が一月三日に知合いの日本人女子学生が来るのでぜひ夕食にと愛想がよく、オールドリッチ氏は父親の病気が重いらしくて元気がなく、ラサム家では昼食の最中であつたが二人とも出てきて上れというので大きなツリーを見せてもらう。夫人は元日のテレビでロースポウルの中継があるから見に来てといい、エリオット家は留守。ニコデム夫人は目に涙をためて大騒ぎ、よほど嬉しかった模様。隣家のランド氏から十六時にお茶の会によばれて行くと、ミノーとディンショウ、フィンク夫妻、ベイリー氏、の向こう三軒両隣で、お茶とは言つても注文は殆どシェリーかウィスキーばかり。おいしいウィスキーで二杯飲む(以上『ガンビア滞在記』にはなし)。

十九時からミノーの家の晩餐に行くと、ベイリー氏が先着していて、父親役を勤めてハムの塊を切り分けたり、お祈りを唱えたりし

てくれる。ジューンの料理は手がかかってすこぶる美味。飲み物はゼミの学生から贈られたスコッチのジョニ赤やシェリー、赤ワイン。レコードをかけて聴くうち、歌、ダンスとなって大いに盛り上がり、二十三時頃教会に行き(『ガンビア滞在記』も同じ)戻ってから贈り物の交換をし、ジューンはボンボン入れに大喜び、こちらはインドのテーブルクロスをいただく(『ガンビア滞在記』にはなし)。

Xマスは雨、昨夕オールドドリッチ夫妻がクラッカーで作ったツリーとラジオを持ってきてくれ、ラジオはガンビアにいる間貸してくれるというので有難かった。オールドドリッチ氏宅へ行き、昼食(フルコース)のご馳走になる。氏は今晚から学会の仕事でポストンへ行くが、公私共に忙しすぎるとこぼす。父は宣教師、兄妹は五人の由(『ガンビア滞在記』にはなし)。

夕方ミノーがドリンクの誘いに来て夫妻で赴き、昨夜の残りで飲む。ニコデム家へ別れの挨拶に行ってきたディンショウが、ニコデムさんはいい人なのにミノーが何故嫌うのかわからないというのに対して、嫌いなのではなく、知らないのだという(『ガンビア滞在記』では二割位にカット)。

二十六日、郵便局へ行き、これまで局長と思っていたのは別人であることが分り、Xマス・プレゼントの礼を言われる(『ガンビア滞在記』にはなし)。

二十七日、ディンショウの出発する日、ミノーによればボンベイにまっすぐ帰るのではなくイギリス廻りで友人宅に一〜二カ月滞在して帰るという。あの、ホームシックはどこへやら(『ガンビア滞在記』も同じ)。

エリオット家は実家のカリフォルニアに帰省、サトクリッフ父子は兎撃ちに毎日出かけ、夫人はコンテスタに応募する小説に没頭。二十八日、ミノーの家で雑誌の押売りに来た子供に二年分の誌代の詐欺にあつたという。ニコデムさんが庄野夫人を買物の誘いに来たが、口財団からの毎月の小切手が来ないので行けないというと、五ドル貸してくれてお金が無くて困つたらうちへ来なさいと親切にいつてくれた由。

ミノーの家で一杯やりながら世間話。二十九日、ミノーは庄野夫人に焼飯の作り方を聞き、今晚やってみるといふ。

三十日、財団の小切手が着いたのでニコデム夫人に五ドル返しに行く。その際夫人はなくなつたら又借りに来なさい、約束しなさいと親切に言ってくれたという。ミノーの車で買物に行き、ワイシャツ、ジンを買う。ジューンがブラウスを買つたという。ミノーは無駄使いをすると言つて激しく怒る。夕方、サトクリッフ氏が明日のニューイヤーズ・イブのパーティのゲストとして来てほしいと招きに来て、ジニーがローズ・スカラシップの試験に合格したことを知らせてくれる。ミノーはこれは大変名誉なこと、この奨学金を得ると就職の際も非常に有利になるといふ。

三十一日、ランサムさんが来て明日テレビでフットボールの試合があるから十六時半に来てほしい、ドリンクとサンドイッチを用意しますと招待してくれる。

二十二時過ぎに、サトクリッフ夫妻が迎えに来て、その際例のXマス・プレゼントのお礼にベッコウの髪飾りをくれた。

ルイス・ホルルのラウンジにはファカルティの夫人達が用意した七面鳥やパン、辛子、バター等が置いてあつて出席者は五十セント

払って食べる。物理のミラー氏は音楽を鳴らし、ミラー夫人はビールをラップ飲みしていた姿が何とも粋であった。

ミノー夫妻もベビーシッターが来てくれたとかで二十三時過ぎにかけつけ、ジューンは楽しそうに踊っていた。ピアノが鳴り、合唱となり、ハッピー・ニューイヤートにぎやかに盛り上がり、三時頃ひきあげた(以上『ガンビア滞在記』にはなし)。

三、両者の相違と特徴

以上両作品の概要をとりまとめて示したが、更にその特徴と相違について分析を進めることによつてそれらをより一層はつきりとさせてみたい。

第一に指摘したいのは『ガンビア滞在記』の方は小説としての構成への配慮が強く意識されていて、できるだけ滑らかに、つながる事を重視して連続性への配慮が顕著である。

〈ガンビアもの〉は何れも毎日書きとめておいた日記からおこした作品であるから、必然的に月日の記載は避けられないのであるが、これを事実そのままにやれば結果は明らかなわけで、ボツ、ボツ切れてしまつて目も当てられないことになる。そこで、三十五の短章から成るこの作品では、各章に最低一つは月日の記載が必須であるうが、それ以上については明記したり、列記したりすることを極力避けて、最初に「○月○日」と記すと、あとは「その翌日」、「二昨日」、「水曜日」、「その前の晩」などと意図的に工夫して処置している。(もつとも一章から八章まではいわばガンビア概説とも

言える総論篇なので月日の記載はない(但し、六章に「十月十六日」と一回だけ出てくる)。

これに対して『シェリー酒と楓の葉』の方は逆に記録性を重視した、ストーリー性の展開や連続性への配慮は殆どないと言つてよいようである。

つまり、『シェリー酒と楓の葉』という作品においてこれを主導するものは何かと言えば、それは具体的な「○月○日」という日付であつて、全てはその日付によつて支配され、統一されているのである。

換言すれば、『ガンビア滞在記』は昭和三十二年七月中旬から翌年七月中旬までのガンビア滞在に取材して、ほぼ一年間の生活を、若いインド人とアメリカ人の夫婦であるミノー一家との交流を経系に、ガンビアとその周辺の隣人との交流を緯系にストーリーにも配慮して描いたものであり、これに対して『シェリー酒と楓の葉』は同じ題材に取材しながらも期間的には、アメリカに着いて一カ月、漸くガンビアの生活になればはじめた昭和三十二年十月二十一日から同年末の十二月三十一日までの約二カ月の生活を、記録重視に徹底して描いたものであり、それが結果として隣人の発見とその定着という永遠のテーマにつながつたものだと言つてよいように思われる。そこから二作の相違がはつきり出てくる。『ガンビア滞在記』の方はストーリーの根幹は若いミノー一家との交流を軸に展開し、その周辺に他の家族との交流を配したが、両者の間にはきびしい框を課した。作品の主人公、主流、主役、主潮低音は前者であつて、後者がそれを逸脱することは決して許さず、注意深くカットし、排除する。これに対して『シェリー酒と楓の葉』の方は隣人の発見と

その定着に魅せられている故に、図式的に言えば外交的・拡散的・積極的・奔放的・行動的となるであろう。同じく『ガンビア滞在記』の方もこれならつて言えば、内向的・集中的・消極的・思索的・排除的となるであろう。

次に言っておきたいのは記録への憑依ということで、作者は記録そのもののおもしろさに魅かれ、それを記録することの魅力に憑かれている。「船長の椅子」でオールドリッチ氏から請われて「鷗外と春夫」についてのコメントをしたことから言え、あたかも古い記録を丹念に収集して、渋江抽斎を書いている鷗外のように。勿論、ガンビアに到着した時にはさしもの庄野氏もあまりの草深さに嘩然とし、「最初のうちはこの淋しいところをいつたいたいどうやって日を送ったものか」と途方にくれるが、隣人ミノ一家との交際が重なり、それを大学ノートに毎日詳細に書きとどめてゆくなかである発見をする。ミノはアメリカ人ではなく、インド人であり、シカゴ近くのノースイースタン大学に留学し、そこで知合ったアメリカ人のジューンと二年前に結婚して一児があり、今年の一月からケニオン大学の政治学講師となり、その性癖、傾向から、父母兄妹等の係累に至るまでが次々にわかつてゆき、その知見は膨大なものとなり、しかもそれはミノ側だけであつてジューン側がこれに加わり、更に父母兄妹のことも追加されれば「ミノ一家の人々」の記録だけで相当量となり、「戸数二百、人口六百」のガンビアのうち交際する人数はせいぜい三十人前後としても、その延べ人数の記録はとて手に負える分量ではないことは明白であつた。言い換えれば、庄野氏は鶉も鳴かぬ草深いガンビアの里に書いても書いても書ききれぬ無数の隣人を発見したのであり、その記録の収集に憑

かれたように留学中明け暮れたのである。また、今までにここで知合った外国人の出身国もポーランド、インド、コロンビア、レバノン、スコットランド、イタリヤ、スウェーデン、メキシコ、ドイツ、フランス、とさまざまで、移民の国アメリカの面目躍如で国情がこれに加わつて一層複雑となる。

そうだとすれば、氏にとつてガンビアでの生活に無聊をかこち、孤独を嘆くいとまなどなかったことはもはや自明の筈である。

第三に指摘したいのはこの第二の指摘と密接に関連するのだが、隣人の発見とそれを記録することのおもしろさに憑かれている庄野氏にとつて書くことは次から次へと向かうから言わば無尽蔵に溢れ出、現われてくるものであつて、材料の涸渇や種切れとは無縁なことであつた。言い換えれば、『ガンビア滞在記』を書いた後の氏にとつて長篇小説を書くことを恐れ、ためらう理由など無かつた。アメリカに渡つて間もない頃、物理学のミラー夫人から「あなたは作家だと聞いているが、何を書いているか」と問われて「短篇小説」と庄野氏は答えているが、まさしく出発期の庄野氏、『ガンビア滞在記』脱稿前の氏はまぎれもなく短篇小説家であつたといつてよい。

しかし、ガンビアで一年を過ごし、帰国して半年を越える期間、長篇小説『ガンビア滞在記』の執筆に没頭し、これを完成させた後では、長篇小説家を名乗ることを躊躇させるものもはや何もなかつた。そこで氏が得たものは材源への示唆であると同時に小説の方法でもあつたから、『ガンビア滞在記』の「あとがき」には

私は滞在記という名前をつけたが、考えてみると私たちはみなこの世の中に滞在しているわけである。自分の書くものも願

わくばいも滞在記のようなものでありたい。

として、我々は「この世の中」の「滞在者」であり、従って作品はこの滞在者を描く「滞在記」のようなものでありたいと明確に規定されて、作品の方向、作者の姿勢が決定されてゆかない。以後の作品の出発点とされる所以であるが、何よりも以後に陸続と発表される『浮き燈台』(61)、『道』(62)、『佐渡』(64)、『夕べの雲』(65)、等の作品群がこれを証するであろう。

大分これまでに紙数を費やしたので、以下簡潔に指摘することにしたい。第四にあげたいのは庄野文学は決して明ばかりの単純で底の浅い世界ではなくてたじろがずに死をもまた刻みこんでいることを言っておきたい。『ガンビア滞在記』の「二十五」ではマウン・ト・バーノンに行く途中列車にはねられて死んだ友人の葬式に行くヒッチハイクの学生と出会って話を聞き、同情したミノーが自分の用事を後まわしにして葬儀所へ学生を先に送り届ける場面があり、また「三十一」章では独身の英語教師ボガードス氏と学生がコンパのあと酸欠でガス中毒死するという痛ましい事件があり、その学生は庄野氏もよく知っている水泳部のキャプテンで妻と一児があり、あと三週間で卒業式を迎えることになっていたという。「三十三」章では散髪屋のジムの末子で、コロンバスで学校の先生をしていた息子が入院して手術後死んだことを告げられている。いずれも二十前後から三十代まで、生のさなかにある若者達の死で、周囲が皆若いだけに死の衝撃は大きい。ただし、この三つの死は『ガンビア滞在記』のみで、『シェリー酒と楓の葉』の方にはない。後者の扱う期間がいずれもこれらの事件の前だからである。

第五に指摘したいのはニコデム教授夫妻の評価ないしは描き方

についての両者の相違の問題である。『ガンビア滞在記』の描き方については詳しくは前稿を参照してもらおうこととしてここでは結論のみを記すことにするが、端的に言ってそこの夫妻像は「頑固」で「交際嫌い」で、どの教授の家族ともつきあいのない「孤立した生活」を送っている変人というイメージが強烈に残るように描かれているといつてよい。だからうっかり読み過すと、単なる非常識な変人ということになってしまふ惧れが十分あるが、実はそれでは読みが浅いことになるわけで、『ガンビア滞在記』中、結果として最も足繁く交際したのはミノー一家が第一位とすればそれに次ぐ位置を占めるのはニコデム家であるからだ。もっとも車嫌いで十九世紀の生活を愛するニコデム教授は買物やドライブ、ピクニックには行かずそれらはもっぱら夫人が勤めるわけであるがこの両家との交際が断然他を圧倒している。

これに対して『シェリー酒と楓の葉』では「頑固」とか「交際嫌い」というような外面的なレッテル貼りは一切せず、したがって無用な先入観、あるいは誤解を与えるような表現は注意深く避けられている。

そのことで如何なる効果が作品にもたらされたかを考えてみると、第三章「林の中」にある「庄野家の招宴に対する横紙破り事件」の場合『ガンビア滞在記』ふうのレッテル貼りで対応すれば、ああ、またか、という奇人の所業ということで切り捨てられ、収束してしまふことであろう。

しかし『シェリー酒と楓の葉』のように、事態が庄野氏とサトクリップ夫人の側から詳細に明かされ、ニコデム夫人の行動がいかに礼を失した、自己中心的でわがままなものであるかが白日の下に

曝されることによつて、却つて夫人の人間的で愛すべき弱点がくつきり浮き彫りされることになつていゝといつてよいであらう。また、パーティにお客を呼んでおきながら、夫に熱があると分るとお客をほつたらかして夫の介抱に夢中になるといふのも同断である。

更に『ガンビア滞在記』にはない教授の炯眼な指摘―「ラテン・ギリシャの知識は西洋のすべての文化の根底だから、中学校ではこれの授業にもっと力を入れなくてはいけない。ある学校で意見を求められた時、数学をやめて全部ラテン語、ギリシャ語を教えなさい、数学の教師に禄なのはいないからといった。(中略)日本の文化は支那から受けているから、漢文をみっちりやらなくてはいけない。」「Keep your tradition.」等々の傾聴すべき意見が幾つもあった。自己中心である故に「奇人」「変人」として敬遠されがちであるが、それを容認しさえすれば当代には稀なあるいは有益な美質を備えた人物であることは明白である。余り長くなつたのでこの辺で打ち切り、次に移ることにしたい。

四、『ガンビアの春』の特質

庄野氏がガンビアに滞在してから丁度二十年、『ガンビア滞在記』を刊行してから十八年にあたる一九七七年(昭和五十二年)一月から第二の滞在記ともいふべき『シェリー酒と楓の葉』を「文学界」(77・1、3、4、7、9、11、78・1、3、5、7)に十回連載し、七十八年十一月に文芸春秋から刊行した。連載中頃の七十七年

秋にケニオン大学のジョーダン学長から招待状が届いて、七十八年四月のオナーズ・デーに名誉学位を受けに帰つてきてほしいとあった。庄野氏にとつても滞在記の執筆再開とガンビア再訪の結びつきは何もなく、まさに青天の霹靂であった。

庄野氏はケニオン大学の「名誉学位授与式」に夫人と出席して78年4月21日〜27日まで一週間ガンビアに滞在した。二十年前は船と列車で旅費が足りなくなるのではないかという不安をかかえた心細い旅であったが、今回は往復ともあつたという間の飛行機の旅であり、多くの知り合いと再開してその絆を強くし、また鬼籍に入られた方や転出者との当時の交友やその後の消息をしのび、更に若い世代との新しい出会いがあつて、この旅は心はずむ楽しい旅であつたと言つてよい。

(A) 変貌

庄野夫妻が初めてオハイオ州ガンビアに滞在した時はその地を記した地図を見つけることが出来ず、僅かに、電話帳に人口六百、戸数二百と記されているのみの途方もなく草深い田舎であつた。ガンビアには二軒の食料品店はあるがそれで足りる筈もないので住人は殆ど連日のように五哩離れたマウント・バーノンの町へ買出しに行く。車を持たない庄野氏や学生の場合はヒッチハイクという不慣れた生活を日々強いられたのである。

ところがこの二十一年間に五百人を少し超える程度であつた男子学生のみが女子学生達の圧倒的な要請によつて男女共学となつたばかりでなく、その数もほぼ三倍の学生数になり、それにつれて教授の数も多くなり(百人を超す)、いまや教授会全員の顔は互い

に分りにくくなっているという。

建物も同様で昔の面影のままの家もあるが、庄野夫妻が住んでいた「白塗りバラック」のように跡形もなく無くなった方が多い。殊に商業地区の近代化、都市化で町の様子が一変して便利になり、もうマウント・バーノンへは行かなくてすむようになった。大衆飲食店ドロシイズ・ランチは店をしめ、ラットレイ老人は死に、住人は変っている。

(B) 再会

再会した旧知には学内者と学外者とがあるので、まずは前者から。

庄野氏のガンビアでの身元引受人であったランサム氏は既にないが、その夫人は「二度も『曾祖母』」(一)になる程の高齢ながら、頭脳は明晰、記憶ははっきりしていて、娘、孫と女三代でガンビアに暮らして再訪を歓迎してくれた(オハイオ大学を出た二人の息子は共に大学教授の職にある)。

シュワルツ氏(音楽)、ハーヴィー氏(仏語)、ミラー氏(物理学)、ベイリー氏(政治学)、フィンクバイナー氏(数学)、ヘイウッド氏(独語)等が現役で活躍しているのを見て、親しくお付き合いした人の殆どは他に変ってしまった、もうガンビアには誰も知っている人はいなくなつたというような気持ちにもすればいつの間にか陥っていたようだが、これら大勢の人々との再会を通してそれが性急な思い込み過ぎないと痛感させられたのである。

次に学外者との再会だが、散髪屋のジムは既に引退して夫婦で暮らしているがその言葉はまた一層聞きにくくなった。ウィルソンとへ

イズの二軒の食料品店は既になく、銀行家のブラウン氏はあれから間もなく死に、郵便局のホーマー氏も引退し、目下トレーラーで旅行中との事で会えなかった。

隣町のマウント・バーノンでデパートを経営するキニー家からは夕食に招かれて久闊を叙し、庄野夫妻が帰国するとその後を追うようにして一九五四年の春に世界一周の旅に出たキニーの両親がその途中東京での庄野宅を訪問するという一幕もあったのだが、その父も今は病床にあり、その自伝『FLEW A CAMEL』は知られざる庶民の生涯を語って興味深く、『ガンビアの春』にも多数抜粋紹介されている。

マッキー夫妻との交友は真率で心を打つ。庄野夫妻が一年間の留学期間を終えてガンビアを去る時に飛行場まで車で見送ってくれたのは大学の関係者ではなく、自ら「二介の農夫」(一八)と名乗るこのマッキー夫妻だったのであり、今度のガンビア再訪のニュースもそれを報じる地元の新新聞「マウント・バーノン・ニュース」を全く方角違いの避寒地フロリダでキャッチして再会できる喜びをいち早く日本に伝えてきたのも氏であり、更に再訪時には飛行機の遅延で大学と直接連絡がとれないため、マッキー家に電話して今の状況を知らせ、大学への連絡をお願いすると、了解したジョスリンが、わかった、すぐ迎えに行くから『心配しないで』のひとつが何と心強く響いたことかとまさしく地獄に仏の思いを吐露しているが当然であろう。娘のシェリルは看護師となり、ボビイは結婚して二人とも独立している。今回の滞在七日間のうちに、四回会ったが、マッキー氏は心臓の持病があるため、今は農園は貸して保険業に専念し、クリスマスになるとフロリダへ旅行用のトレーラーを運

転して行き、三月末までそこで暮す生活をしている。決して多弁ではなく、短い言葉だが、人柄がにじみ出るようで、心に残る。「二十年間会いたいと思っていた。それが本当になった。」「自分の農園を持つていると(中略)いつでも好きな時にこうして歩くことが出来る。誰も口出しする者はいない。出て行けという者もない。それが実に気分がいい。本当はマウント・バーノンへ引越す方がいまの保険の仕事のためには都合がいいのだが、引越さないでここにいるのはそのためだ」

また、当時ロックフェラー財団の人文科学部長をしていて留学先にケニオン大学を勧めてくれたファーズ博士が(引退してオハイオ州オックスフォードに住んでいた)名誉学位を受ける知らせをいの一に伝えると殊の外喜んで、病み上がりの夫人を伴い、式に一滴でかけつけてくれ、(坂西志保が生きていて聞いたらどんなに誇らしく思ったことでしょう)と祝ってくれた。

(C) 転出者

ミノーは現在ロレンス・カレッジ(ウイスコンシン州アップルトンにある)において、ヘイウッド家でのパーティの際(庄野夫妻滞在時の教授メンバーを全員招いてのパーティを開いてくれた)夫人の好意でジューンとは電話で話ができ、ミノーは授業中でできなかった。

(D) 過去帳

庄野氏が帰国すると間もなく早逝したのが英文学科主任のサトクリフ教授で学園の内外のあらゆる面で啓発と刺激を受けた魅力的

な人物であった。夫人のプリッシラは小説を書いていたが、夫の死後は図書館司書の資格を取るために大学に入り直したという。

数学のニコデイル教授夫妻にはよく世話になったが、教授はケニオンをやめてからは教え子のジニイのいるニューヨーク州に移って研究生活に専念していたが、数年前に亡くなった。画が趣味の夫人は健在である。

物理学のミラー教授の夫人は独得の風格をもった人で、パーティでは唯一人堂々とビールをラップ飲みしていて異彩を放っていたが亡くなった。夫人はシカゴ大の物理を出た人で、教授の教え子であったが、神学研究に打ち込み、その著書を送られた。

(E) 卒業生

ケニオンの卒業生ではオールドリッチ氏の教え子でドイツに留学したマクラレンが哲学科の准教授で二人の高校生の父親になった。

ローズスカラシップの奨学金を得てオックスフォードに留学したジニイはニューヨーク州ユティカにあるユティカ大学の英語科教授になっていて、傍に住むニコデイル夫人の支えになっているようだ。ハワイ二世のトムは予定通り医師になってホノルルに、ケネディ(ブルース)はカリフォルニアのサクラメントに住んでいる(ジニイ以下の三人とは時間が取れなくて会うことも、電話で話すこともできなかった)。

(F) 新しい出会い

古典科の准教授のウェバー氏(ラテン語)とその夫人邦子氏(彼

女こそは今回の庄野氏への名誉学位授与への直接にして最大の貢献者である。というのは七年前にケニオンに来て間もなく大学の図書館にあった『ガンビア滞在記』を邦子さんが読んで感動し、その内容をウエバー氏に詳しく伝えたことがこの作品と作家との評価、発掘に直接つながったからであり、更に二人を通じてその事が古典科の主任教授マッコラ氏に紹介され、それが今回のオナーズ・デーへの招待の出発点になったからである。しかもその作者の署名入りの『ガンビア滞在記』は刊行直後の一九五九年の春、世界一周の旅の途中、東京の庄野氏宅へ立ち寄ったキニーの父が丸善から八冊買ってくれて、その中から母校の図書館へ寄贈してくれた一冊という奇縁もあったのである)、英語科の准教授ターナー氏(不思議なことに本人と話をする前にその父親と東京で電話で話をするという奇遇もあった。父のターナー教授は高名な人類学者で、東大に招かれて来た時に息子からの伝言を伝えてきたのである)とその夫人メイ・リン、同じく英語科のシャープ氏とその夫人イネスとの出会いは一殊に若手のターナーとシャープはケニオンの名を世界的に知らしめた「ケニオン・レビュー」が前学長によって廃刊されたことを遺憾として一九七八年一月の復刊第一号をめざして基金の収集に走り回っていて、ジョーダン学長からの同意は取り付けてあるのだ。そしてターナー氏からは庄野氏にも協力要請があり、特に日本担当の編集者として海外文学の紹介に積極的に取り組もうとしている復刊号の趣旨に力を貸してほしいと懇願されていた。これに対して氏は「万事に引込み思案」で「そういう仕事に不向きな」所から返事にはあいまいに「お目にかかった上で相談したい」と書き送ったがガンビアに来て考えが変わった。

もしそういう理由で氏が編集協力をことわったとすれば「相手に失望を与えるばかりでなく、あとあとまで悔いが残」ることになると考えざるをえなかったからである。かくして「ケニオン・レビュー」復刊の編集委員は決定して祝賀のシャンパンとなり、ジョーダン学長の配慮でマウント・バーノン随一のレストランで「どんな料理でもいいから好きなものを取りなさい」という宴席になって、新しい第一歩が踏み出されることになった。

『ガンビアの春』は明るい。はずんだ響きをもっている。遠い青春のよみがえりを体験するとはそういうことかもしれない。

『ガンビアの春』とは一言で言えば、古い友情を新たにし、新しい友情の始まりを確信する旅であった。(この章未完)

注

1 庄野潤三「砂金」(昭49・1「群像」『休みのあくる日』昭50・

2・10 新潮社所収) 同『ガンビアの春』(前出)の「七」参照。付言すれば、「砂金」によると、庄野氏の聴講したランサム教授の「詩入門」の授業は「週一回」とあるが、後述のように『ガンビア滞在記』『シェリー酒と楓の葉』『懐かしきオハイオ』によれば「週二回」であることは明らかなので、細部の記述については小さな異同はあるようである。あるいは「砂金」の記述は誤植かもしれない。

2 『シェリー酒と楓の葉』及び『懐かしきオハイオ』参照。

3 初出原題は次の通り。「万聖節のころ(私のアメリカ便り)」昭33・1「新女苑」。

- 4 「窓の燈」(二二九頁)にあるミノーの言葉。
- 5 「林の中」(『シェリー酒と楓の葉』)。
- 6 拙稿「庄野潤三論(四)―『ガンビア滞在記』をめぐって―」(08・3・19「都留文科大学大学院紀要12」)参照。
- 7 注6に同じ。
- 8 その後発表された「ガンビアの春」補記(80・5「文芸」)によれば、ランサム夫人は元気でブリッジを楽しみ、キニーの父は自伝が「ガンビアの春」に紹介されている事を知って喜んだが、78年に没。床屋のジムも。マッキー家は原油の値上がりでフロリダ行きを中止を危惧。「ケニオン・リビュウ」復刊79・1。定期購読者は一万八千人で、旧の最盛期の約四倍。ファーズ博士が79・2「ガン」で死去。―主な事項を記すとこのようになる。